

## 霞ヶ浦水質史

浜田篤信

霞ヶ浦が大変よごれてきて問題になって来ていますが、これから先、どうなるのかと、皆さん心配されておられることと思います。そこで今回は、霞ヶ浦の誕生から現在に至るまでの水質や利用のされ方を振りかえつて見て「これからの霞ヶ浦をどのようにしたらよいか。」の参考にしていただきたいと思ひます。私共、霞ヶ浦の研究にとり組んで日も浅く、誤つてるところもあるかも知れませんが、それらの点についてはよろしく御指摘下さい。

### 一、誕生

良く知られていますように、この湖は海跡湖です。縄文前期の海岸線は霞ヶ浦や利根川を通りこして、栃木や群馬の方まで入り込んでいました。これは当時気温が高く、したがって海面が高かった為、現在の低地にまで水面が来ていたわけです。この頃の貝塚の分布は、この頃の霞ヶ浦の湖岸線と一致しているといわれ、現在の湖面よりもかなり拡大です。水質も、およそ四〇メートル

ルぐらいあつたと思われませんが、その後、徐々に、うめられて行きます。利用の仕方は食物採集の場が、第一にあげられましょう。その後、気温の低下にもなつて海退がおこり、地形的に見て、霞ヶ浦の原形ができあがつたものと思われます。これが、今から五、三千年前のことです。

### 二、奈良時代

その後の湖の変化を伝える資料として常陸風土記があります。この頃は湖尻の方が広く海水が充分流入するよな形で、「香取の海」とよばれる部分を形成し、この頃の手段をもつてすれば、人々の目には大海とうつたことでしょう。水質が海水であつたことは奥部ですら、「高浜の海」とよばれていたことでもわかりますが、生息する生物も、鯨以外は何んでもいたと云われるぐらい海のもので占められています。またこの頃には、大和朝廷による統一が進み、石岡には国府が置かれ役人が派遣されて来ます。したがって、利用の仕方として、交通、舟運が重要になつて来たことでしょう。それらが、常陸風土記や万葉にも見られますように、レジャーの場夕すずみの場、若者達のデイトの場としても利用されたものと思われます。